Osaka University Knowledge Archive

Title	ドルポ考 : チベット帝国支配下の非チベット人集団
Author(s)	岩尾, 一史
Citation	内陸アジア言語の研究. 2016, 31, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/58631
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

内陸アジア言語の研究 31, 2016.10, 1–19

ドルポ考

—— チベット帝国支配下の非チベット人集団 ——

岩 尾 一 史*

1. はじめに

古チベット語史料中には多くの未解明術語があり，本稿で取り上げるドルポ（dor po）もその一つである．ドルポはチベット帝国の根本史料である『年代記（*Old Tibetan Chronicle*）』や『編年記（*Old Tibetan Annals*）』にも登場するが，たいていの未解明の術語と同じようにこの語が大きく注目されることはなく，また先行研究でも部族名であるかあるいは一般名詞であるか意見が分かれており，統一した見解は存在していない(1)．本稿では，筆者が最近発見した新史料を含む，ドルポが現れる全ての史料を検討し直し，ドルポとは何かを考察したい．

2. 『年代記』『編年記』に現れるドルポ

敦煌の莫高窟蔵経洞発現『年代記』にはドルポが 2 度現れる．先行研究が最も集中しているのもこの『年代記』の記事であるので，まずこの 2 度の登場事例から確認しよう(2)．

史料 1

バー・ツェンシェルドロェ（dba' bstan bzher mdo lod）たちが軍隊を涼州（mkhar tsan）(3)まで進め 8 つの州城(4)を陥れた．ドルポを選抜して帝国の民（'bangs）として受け入れた．

dba's btsan bzher mdo lod la stsogs pas / mkhar tshan yan chad du drangste / mkhar cu pa brgyad phab nas / dor po bton te / 'bangs su bzhes so / /

---

* IWAO Kazushi. 京都大学・白眉センター・特定准教授

(1) 先行研究については第 3 章にてまとめて述べる．

(2) チベット語翻字は基本的に Old Tibetan Documents Online（OTDO）の方式に準じるが（Imaeda et al 2007, pp. xxxi–xxxiii. OTDO site: http://otdo.aa.tufs.ac.jp/），加えて以下の記号を使う．

録文	[---]	文字が判読不能の箇所．- の数で文字数を示す．
	[. . .]	文字が判読不能の箇所．文字数は不明．
訳文	[. . .]	文字が判読不明のため譯出できない箇所．
	【 】	訳文理解のために筆者が補った箇所．

(3) mkhar tsan < Ch. 姑臧＝涼州．Uray 1991 を参照されたい．

(4) 山口瑞鳳は mkhar cu pa を「州城」と解釈し（山口 1981, p. 28），ウライ（Uray, G.）も従う（Uray 1991, p. 200, n. 30）．山口はその解釈の根拠について明言しないが，おそらく mkhar「城」，cu「州」と解釈したのであろう．今，山口訳に従う．

（『年代記』ll. 381–383）[5]

引用箇所の出来事が起こったのは，チベット帝国のツェンポ（皇帝）であるティソンデツェン（khri srong lde brtsan 755?–797）[6]のときである．涼州がチベットの支配下に入ったのが広徳 2（764）年[7]のことと考えられるから[8]，チベットが涼州攻略に出た 764 年頃，「ドルポ」が選抜されて帝国の民として受け入れられたということになる．これがどのような意味を持つかについては，後で考察しよう．

『年代記』のもう一つの事例をみてみよう（史料 2）．

史料 2

そして，唐軍を王【孝】傑尚書なる者が率いて現れ，チベットの将軍論ティンディンが敵に対する作戦（？）[. . .]とヤクの作戦を行った．中間の地点にて戦闘し，多くの漢人を殺して，漢人の骸が天にそびえたったのを，百万人を殺したあかしとした．タクラ・ギャドゥル（「虎峠の漢人墓」）とマ・ギャドゥ【ル】（「マチュの漢人墓」）はそこから名付けられた．ガラブまでの地域ではニャンとドルポたちを，王もろとも民として屈服させ，五部の辺境の大臣も設置した．

de nas rgya 'I dmag / / weng ker zhang shes bda'ste byung ba las / / bod kyi dmag pon / blon khri 'brIng gis / dgra thabs [. . .] / dang g.yag ltar byas nas / / go bar du g.yul sprad de / / rgya mang po bthungs nas / rgya 'i ro gchig gnam du 'greng ba ya[ng] [myI] 'bum bsad pa 'I mtshan ma zhes bya 'o / stag la rgya dur dang rma rgya dus kyang de nas btagso / rnga rab phan chad / / myang da[ng?] / dor po la stsogs pa / / rgyal po dang bchas su 'bangsu bkug nas / / so blon sde lnga yang btsugs so / /

（『年代記』ll. 521–524）[9]

引用した箇所は 7 世紀後半にチベットを事実上支配していたガル家のガル・ティンディンと王孝傑の歌合戦の章の結末部分である．歌合戦自体は架空の出来事であろうが，戦争の結果については事実を下敷にしているようで，この戦闘については『編年記』に関連する記事が現れる（史料 3）．

---

(5) Bacot et al. 1940–1946, pp. 115, 154; 王・陳 1992, pp. 56, 132, 167; gnya' gong 1995, pp. 103–104; 黄・馬 2001, pp. 292, 294.

(6) ティソンデツェンの登位年をめぐる議論については Beckwith 1983 を参照されたい．

(7) 『元和郡県図志』巻 40，隴右道下涼州条，p. 1018.

(8) Uray 1991, pp. 201–202.

(9) Bacot et al. 1940–1946, pp. 122, 170; 王・陳 1992, pp. 65, 140, 172; gnya' gong 1995, p. 402; 黄・馬 2001, pp. 271, 273.

史料 3

未（695）年，【冬】（中略）．大論【のガル・】ティンディンは吐谷渾地区にいて，タクラ・ギャドルにて唐の将軍王尚書（＝孝傑）と戦って多くの漢人を殺した．それで一年【が過ぎた】．

$ / lugI lo la （中略） blon che khri 'bring 'a zha yul du mcIs shing / stag la rgya dur du rgya'I dmag pon wang zhang sho dang g.yul sprade rgya mang po bkuM bar lo chig /

（『編年記』695 年条，P.t.1288 + IOL Tib J 750, ll. 119–122）[10]

史料 2 と史料 3 が同じ戦闘を述べていることは明らかであり，史料 2 でいうニャンとドルポが支配下に入ったのが 695 年であることが分かる．したがってこの戦闘は史料 1 よりも半世紀前に起こったことになる．史料 2 にドルポとともに現れるニャンが何かは現時点では不明なのであるが，本稿ではとりあえずドルポのみを考察の対象としておきたい．

さて，史料 2・3 ではチベットが唐軍に大勝し，タクラ・ギャドゥルとマ・ギャドゥルという地名名称ができたというが，その位置はどこであろうか．幸いなことに，この戦闘については対応する記事が漢文史料にある．『資治通鑑』巻 205 によると，証聖元（695）年秋 7 月辛酉にチベット軍が臨洮に侵攻したので王孝傑を粛辺道行軍大総管に任じて迎撃させたが（p. 6503）[11]，翌年万歳通天元（696）年 3 月壬寅に王孝傑たちは「洮州西素羅汗山」にてチベット軍と戦闘し敗戦したという（p. 6504）[12]．この記事を用いて佐藤（1977, p. 361）はタクラ・ギャドゥルを洮州の素羅汗山に比定した．素羅汗山の正確な位置は明確ではないが，『読史方輿紀要』巻 60，洮州衛の条（p. 2893）によると，素羅漢山は洮州の西にある．

問題はマ・ギャドゥ（rma rgya dus）の解釈である．バコ（Bacot 1940–1946, p. 170）は「傷つける（rma）漢人の集積（rgya dus）」と訳し，佐藤（1977, p. 361）もその解釈に従った．しかし，タクラ・ギャドゥルとの呼応関係を考慮すると，王・陳（1992, p. 65）が指摘する通り dus を dur と読み替え，マ・ギャドゥル（rma rgya dur）とすべきであろう．さらにはタクラが地名であるなら，呼応するマ（rma）も地名と考えるべきであろう．王・陳はそのように考えた上で「“馬”水之漢墓」（同, p. 172）と訳したのである．

黄・馬（2000, p. 275）は王・陳よりもさらに考察を進め，マ（rma）がマチュ（rma chu），すなわち黄河上流域であると指摘した．したがって黄・馬の結論としてはマ・ギャドゥとはマ・ギャドゥルの異形であり，「マチュの漢人墓」を意味することになる．筆者もこの結論に異論はない．

---

(10) 該当箇所の訳については Bacot et al. 1940–1946, p. 38; gnya' gong 1995, pp. 77–78; 王・陳 1992, p. 143; 黄・馬 2000, p. 44; Dotson 2009, p. 98 を参照されたい．

(11) Uray 1991, pp. 201–202.

(12) Cf. 『新唐書』巻 4，則天皇后本紀，p. 96.

なおタクラ・ギャドゥルの位置はすでに確認したとおりであるが，マ・ギャドゥルの位置は何処であろうか．黄・馬（2000, p. 275）は黄河流域であるということを述べるだけで，その具体的地点を明らかにしていない．しかし，史料 2，3 の戦闘が同一のものである以上，両地点は大きく離れていないはずである．そこでタクラ・ギャドゥルがあったと想定される洮州周辺と黄河流域との距離をみると，洮州から洮河（klu chu）に沿って北上して，現在の甘粛省臨夏回族自治州永靖県あたりで黄河に合流するのが，洮州〜黄河間の最短コースであることがわかる．そこで当面は，両河の合流地点付近をマ・ギャドゥルの位置に想定しておきたい．

さて史料 2 にはもう 1 つの地点ガラプが現れる．リチャードソンは“camel ford on the Yellow river (?)”「黄河のラクダの浅瀬（？）」とするが（Richardson 1990 [1998], pp. 167–168），具体的な位置は不明のままである．この地点が先ほどの戦闘地点とそれほど遠く無い場所であることはほぼ間違いないであろうから，今は仮におよそ洮州〜黄河のあたりと想定しておきたい．

以上の考察を元にすると，チベットと唐との戦いは現在の洮州の西から現在の臨夏回族自治州永靖県あたりで発生したということになる．ガラプの正確な位置が不明のままであるのは遺憾だが，ニャンとドルポが居住していたのも洮州〜永靖県のラインの西側ということになろう．

ここで史料 1〜3 の分析結果をまとめると，ドルポとは集団名であり，洮州よりも西側に居たドルポは 695 年頃にニャンとともに民としてチベット支配下に入り（史料 2, 3），764 年に再び民として受け入れられた（史料 1）ということになる．

3. ドルポの意味

では，ドルポとは具体的に何を意味するのであろうか．この語の解釈は研究者によって異なり一定していない．まず『年代記』の訳注を最初に出版したバコとトゥサン（Toussaint, G.）の解釈をみてみよう．バコとトゥサンはまず史料 1 のドルポについてはマザール・タク（Mazār Tāgh）出土チベット語木簡に現れるドルテ（dor te pa）との関連について指摘しているが[13]，一方で史料 2 のドルポについては征服された部族の名称と解釈している（Bacot et al. 1940–1946, p. 170）．つまりバコとトゥサンは史料 1 と 2 のドルポを別のものとみているということになる．

それに対して山口瑞鳳は，史料 1 のドルポについて全く異なる解釈を提案し，「降伏者」と訳した（山口 1981, p. 28）．問題はこの訳に何ら注釈がついていないことであり，その点はウライ（Uray. G.）がすでに指摘している（Uray 1991, p. 200, n. 31）．とはいえ山口の解釈がある程度の支持を集めたことは，批判を行ったウライ自身も山口説に近い defeated という解釈をし

(13) 黄・馬（2000, pp. 275–276, n. 4）は史料 1 のドルポをドルテ千戸部と同一視しており，明らかにバコ（Bacot et al. 1940–1946）のドルポ＝ドルテ千戸部説を踏襲しているが，黄・馬が言及していないのは不審である．

たこと（ibid.），また王堯・陳践が史料 1 のドルポを「守城官員」とし，チベット語の注釈では ngo log pa'i mkhar dpon「反逆した城の役人」と解釈していることからも明らかである（王・陳 1992, p. 167; p. 86, n. 312）[14].

さらにニャコン（gnya' gong 1995, p. 106, n. 11）が「唐に反逆した人であると云う（thang la ngo log pa'i mi yin skad）」と説明するのは確実に王・陳の解釈を参考にしているのであり，つまるところは山口説の影響下にあったということになる.

以上の先行研究をまとめると，同箇所のドルポの解釈については①部族名，②ドルテ千戸部とする説，③「降伏者」「敗北者」「反逆者」など普通名詞として解釈する説，の 3 説が存在することになる.

このうち②については，ドルテ千戸部が中央チベットから派遣された軍千戸部であることが判明している現在では[15]，成り立たないことが明白である．もし史料 1 が②説でうまく解釈できたとしても，史料 2 のニャンやドルポは明らかに王を有する部族として登場しているのであるから，文脈と齟齬をきたすのは明らかである.

また③についても，史料 1 の解釈には合うとしても，同じく史料 2 のように王を有する部族としてのドルポと「降伏者」という解釈が合わないことは明らかである．そうなると，残るのは①部族名説のみである.

しかし以上の考証は全て『年代記』と『編年記』中のわずか 2 つの用例にのみ基づいたものであるし，またドルポが部族名であるとしても具体的にそれが何か，更なる検証が必要であろう．実際のところ，上記以外にもドルポの用例は確認されるのであり，その 1 つが次章で引用する IOL Tib J 134 + P.t.1076（史料 4）である.

4. IOL Tib J 134 + P.t.1076

（1）文書の概要

『年代記』と『編年記』以外でドルポが現れるのは，大英図書館所蔵 IOL TIb J 134（= Ch. 73. IV. 14）の折本状写本第 1 紙である．この文書断片は元来シート状の公文書であったらしいが，後に折本の材料として二次利用されたものである．なお第 2 紙以降は祈願文であり第 1 紙の内容とは無関係である（de la Vallée Poussin 1962, p. 52, no. 134）.

この第 1 紙，あるいは公文書断片を始めて学界に紹介したのはトーマスである（Thomas 1951, pp. 49–50）．断片にはチベット語公文書の冒頭部分が残存しており，その書式が明らかに帰義

---

(14) 王・陳（1992, p. 172）は興味深いことに史料 2 の方ではただ「道尓保」と音訳するに止める．これは王・陳が史料 1 と史料 2 のドルポを別のものと認識していたことを示すのかもしれない．ともあれ解釈に一貫性がないことは問題となろう.

(15) 例えば岩尾（2000, pp. 8–9）の表 1 を参照されたい.

軍期のチベット語公文書のそれであったために複数の研究者が言及したものの[16]，そこに現れるドルポについては注目が集まらなかった．問題のドルポは第 4 行に現れるが，トーマスは「ドルポは間違いなく牛（またはヤク）のくびきを管轄する人である」と説明し，さらに語彙集では「御者」としている（Thomas 1955, p. 32）．

この断片はテキスト冒頭の 5 行しか残しておらず，そのためテキストの文脈が不明のままに置かれてきた．しかし筆者は幸いにもこの文書の離れを発見することができ，一定程度テキストを復元することができた．

文書の状況を簡単に説明しておこう．発見できた離れの文書はフランス国立図書館所蔵敦煌文書の P.t.1076 である．まずはその形状から説明しておこう．P.t.1076 は IOL Tib J 134 と同じく貝葉本であり，残存するのは 3 葉のみである．シートは元の公文書を適宜切り分け，貝葉本として利用しようとしたらしい．公文書の書面側を内側に 2 枚糊付けにしようとしたようだが，どのような理由によるのか結局貝葉本としてはテキストを記さなかったらしく，3 葉の裏面は全て余白のままである．ただし，文書を 2 次利用して貝葉本を作成する際に 3 枚重ねにする例もあるので，件の文書も 3 層構造の中間紙にされていた可能性も捨てきれない[17]．

図 1　IOL Tib J 134 + P.t.1076 の概念図

今，P.t.1076 の各葉をそれぞれ P.t.1076-1，-2，-3 と呼んで相互の連結関係を確認しておこう． P.t.1076-1 と -2 は元々用紙が繋がっており，テキストも直接繋がる．それに対し，-3 は同一テキストであることは確実であるものの，他の断片とテキストが直接に繋がっているわけではない．各断片のテキスト内容を吟味すると，どうやら IOL Tib J 134 → P.t.1076-3 → P.t.1076-1 → P.t.1076-2 の順番に並べることができそうである【図 1 参照】．

最初の行に現れる bog ya が帰義軍節度使の称号である僕射であること，そしてこの僕射が張議潮であること，さらにこの文書の発行年である午年は 859 年にあたることは山口によってすでに指摘されており（山口 1985, p. 511），筆者もこの比定に異論はない[18]．

---

(16) 例えば Uray 1981, p. 85; Takeuchi 1990b, p. 180 を参照されたい．

(17) 管見の限りこのような例に IOL Tib J 138 がある．小版の貝葉本であるが，1 葉が 3 枚の用紙を貼り合わせることで作られており，中間の用紙は漢語公文書の二次利用である．

(18) 年代比定については坂尻 2002, p. 80, n. 10 も参考にされたい．

（２）史料４のテキスト・試訳・語注

〔テキスト〕

IOL Tib J 134

(1) / bog yas / / khrom chen po 'I 'dun tsa / / leng cu nas / / rta 'I lo 'I dbyar sla 'bring po 'i / (2) [. . .]gs kyI phyag rgya phog ste / / sha cu dang / / kva cu 'I tshi shi la mchid stsal pa / / phag stag la (3) [. . .] gsol na / / na ning khrom chen pos / / chab sr[i]d dang to kun du mdzad nas / / slar gshegs (4) [. . .]ul du / / dor po pe'u gcig / / gir kis gyis btabste / / sgyes pa pho gza' ni bkum / (5) [. . . m]nangs su 'tshal pa 'I nang nas / / sug cur gnyo za dse ldem zhes mchi' ba / [. . .]

P.t.1076-3

(1): [. . .] [---] tson pa smad gnyis / / gir kis las / bdag gis rin rta gny[i]s kyi [khu/khr-] / / [-]u[. . .] (2): [. . .] gchig dang / cer chen gnyis dang / dar yug gnyis / re[-]u snam gchig dang / bag phran yug [. . .] (3): [. . .]g tsal te / / mjal nas / / 'chang ba las / / dor po myi bros dag chig mchis pas / / khar [. . .] (4): [. . .] blar gsol te / / bud myed 'dI smad / khong ta dngos kyi mchis brang bu smad lags par snyad btag[. . .] (5): [. . .] la stsal ching gthad par gsol ba las / / dor po 'dI rnaMs kyI mchis brang / dngos ma lags na / / [. . .] (6): [. . .]i[. . .] las / / khang ^ab 'ga's gnyo za d[s]e [. . .]

P.t.1076-1, 2

(1) [. . .] (2) [. . .] 'dI rnaMs ni / / yang myIs spun gyi skud por mchis te / / khong ta 'I mchis brang bu smad ma lags par / (3) [. . .]s / / bran mo smad kyang / / bdag la gthad pa las / / de bar yang pang tshab she 'deng dang / rma legs (4) [. . .] gsol kyi phyag rgya zhig 'chang ba las / / rin gyis mjal ba dang / gnang gthad la rten du (5) [. . .]r / / bran mo smad gnyis / / tshi shis mchid nan stsal te / / pang tshab la gthad par 'byung zhe [-] (6) [. . .] / / bran mo smad yang thabsu / / pang tshab gyi [--] par 'gyurd pa / / bdag [. . .] (7) [. . .] ste / / tshe gchig du srog lus 'ben du btsugs nas / / zho sha rtse gchig du phul pa 'I (8) [. . .] / bdag dngos ni rje blas yun rings bye nas 'tshal / / yul gzhi na kha 'dzin maMchis pa 'I skabsu (9) [. . .] las khyo nI g.yul du bkuM / / gnyis / / yul kyi mthar mchis ba (10) [. . .]s rin gyis mjal te / / 'chang ba / sgo yus spang la phubste / / dor po myi bros nyams len zho sha (11) [. . .] chig kyang ma phul bas / / sgyu thabs kyi gsol stobs khar bran mo 'tshal pa / / zla dpe' maMchis (12) [. . .] stams las chad ching mchis na / / yul ris gang la gtogs pa 'I tshi shis / / dor

〔試訳〕

IOL Tib J 134

（1）僕射が，大軍団[i)]の議会【開催地の】涼州から，午年の夏仲月の（2）[. . .]の公印を

押して【命令する】．沙州と瓜州の刺史（tshi shi）[ii]に文書を送る：
パクタクラ（phag stag la）[iii]（3）[. . .]が上申した．
去年【=巳年】，大軍団が大斗軍（dang to kun）[iv]に進軍して，戻ってきた（4）[. . .]において，ドルポの小部をキルギス（gir kis）が撃って，大人の男女を殺した．（5）[. . .]従僕とした内，粛州にニョ姓の女でゼデム（dze ldem）なるものがいて[. . .]

P.t.1076-3

捕まえた 2 人の女は，私がキルギスから代価として馬二頭分の保証額（? khu）[v]，（2）[. . .]を 1 つ，cer cen を 2 つ，絹 2 匹，re[-]u を 1 つ[vi]， bag phran [-] 匹[vii]（3）を払い，我々は契約を交わし，【女を】保持した．しかしドルポの逃戸（myi bros）[viii]が来て［. . .］(4)［. . .］【ドルポが】お上に申し上げた．「この女と婢女（bud myed 'di smad）[ix]は当事者（＝ドルポ）の現在の妻と娘です」と難癖をつけ［. . .］(5)［. . .］に命令を下して引き渡すように申し上げた．
しかしドルポが彼らの妻であるという事実は全くなく［. . .］(6)　［. . .］康押衙（khang ^ab 'ga's）がニョ家のゼデム［. . .］

P.t.1076-1，2

（1）［. . .］(2)［. . .］彼女らはまたミ兄弟の姪であると言い，当事者の妻でも娘でもないと，(3)［. . .］婢女も私に付与されたが，その間にも【ドルポのミ・】パンツァブ・シェデンとマレク（4）　［. . .］我々は［. . .］の公印を保持しており，また代価をもって取引し，【婢女を】与えられ引き渡して確実に（5）［. . .］2 人の婢女については刺史（tshi shi）[x]が厳しい決定を下して「パンツァブに引き渡すように」と言い，(6)［. . .］婢女も謀略によってパンツァブの【もの】になった．
この事は私［. . .］(7)［. . .］ 1 日に身命を鞍に置き，貢献を一心に捧げて（8）［. . .］私は今，公務を長らく求め，本拠地に助けがない時代に（9）［. . .］より，夫は戦いで殺された．娘と婢女の 2 人はくに境にいた（10）［. . .］買い取って保持していたこと，訴えを恐れることなく覆いかくし，ドルポのミ兄弟は働き（nyams len）や貢献を（11）一つも捧げていない．
偽りの上申を申し立てて婢女を求めるなどして，文書の写しも存在せず（12）［. . .］不当な抑圧であるので，領域全てを管轄する（yul ris gang la gtogs pa 'I）刺史がドルポ［. . .］

〔語注〕

i) khrom：チベット帝国の地方軍事行政単位である khrom については Uray 1980 を参照されたい．我が国では山口（1981, p. 44, n. 129）の「軍団」と武内（1990a, pp. 39）の「軍管区」と

いう 2 種の訳語が存在する．筆者は基本的に武内訳に従ってきたが，一方で明らかに軍団として機能する khrom が文献に存在することも確かである．例えば，帰義軍政権初期に伊州から発行された上行公文書 P.t.1109 に現れる khrom は明らかに帰義軍の「軍団」を意味するのである（岩尾 2016, p. 349, n. 17）．

ii) tshi shi：この語が漢語「刺史」の音訳であることはウライ（Uray 1981, p. 88）の指摘通りである．

iii) phag stag la：次行冒頭が破損しているため，この語の意味が必ずしも明瞭ではない．トーマスは人名の一部とし，この案件の原告であると解釈している（Thomas 1951, p. 49）．

iv) dang to kun「大斗軍」：dang to kun＝大斗軍という山口（1985, p. 511）の地名比定に従う．なお大斗軍は涼州の西 200 里に位置した．Cf. 佐藤 1977, p. 449.

v) rta gnyis gyi khu「馬 2 頭分の保証額（?）」：この箇所の解釈上の問題は khu である．現行の辞書（例えば Jäschke 1881, p. 40, khu bo 項）によると khu は「液体」「精液」であるが，明らかに文脈と合わない．筆者は khu を khums「保証」の誤記（あるいは異綴）と考えたが，あくまでも暫定的な読みである．

なお, 7–8 世紀の馬と奴婢の売買価格については基本的に奴婢の方が高く, 例えば池田（1983, p. 49）によると隋〜初唐にかけての奴婢の標準物価は 10,000 銭，馬が 4,000 銭であった．もちろんこの価格は上下したはずで, その後安史の乱により奴婢の価格が 20,000〜40,000 文に高騰したというし（同，p. 51），吉田・森安（1988, pp. 16–17）が 7 世紀から 8 世紀半ばの敦煌・吐魯番漢語文書に現れる奴婢の価格を考察しているのでそれに依拠するとおよそ銅銭 8,400〜18,400 文で推移している．またチベット語契約文書では馬が 5,000 文（敦煌），奴が 8,000 文（Mīrān），婢が 7,000 文（敦煌）で売買されている例がある（Takeuchi 1995, p. 22）．

いずれにせよ, 馬と奴婢とを比較すると奴婢の方が基本的に高価であることは言えるはずであり，すると本文書において，婢女 1 人が馬 1 頭の価格にさらに他の物品を足して売買されているのも不思議ではない．

vi) cer cen, re[-]u：いずれも物品の名称であろうが，具体的には不明である．

vii) bag phran：量詞が yug「匹」であるから布帛類であることは間違いない．また phran は「小さい，少量」を意味する（Jäschke 1881, p. 354）．問題は bag である．「帛」の音訳である可能性もあるが，帛の中古音は *pɐk*（Karlgren 1957, p. 207, no. 782f）であり，かつ 9–10 世紀河西方言のチベット文字対音では pheg（高田 1988, p. 402, no. 1028）で写されているから，もし帛であるならば bag を beg / pheg の誤記と考える必要がある. 現時点では不明としておきたい．

viii) myi bros：「逃戸」と解釈した．Cf. 岩尾 2016, p. 348.

ix) bud myed 'di smad：bud myed 'di は「この女」と解釈でき，一方で残る smad については文脈から bran mo smad「婢女」のことを指すと考えられる．

x) tshi shi：この「厳しい決定」をくだした刺史が，沙州あるいは瓜州いずれの支配者である

のかは不明である．

（3）史料4の考察

テキストに失われた部分が多いので，必ずしも全ての内容が判明するわけではないが，断片をつなぎ合わせて考えると，訴えの内容はおよそ次のようなことらしい．

(1) 去年（未年），キルギスがドルポの小部を襲い，粛州のニョ・ゼデムと某なる2人の女性を連れ去った．
(2) 当文書の原告（トーマスによればパクタクラ某．Cf. 語注 iii）は，キルギスから2人の女性を買い取った．
(3) しかし，ドルポの逃戸であるミ兄弟（パンツァブ・シェデンとマレク某）が，自分たちの妻と娘であると刺史に申し立てた．
(4) 刺史はドルポのミ兄弟の訴えを聞き入れ，2人の女を兄弟に引き渡した．
(5) 原告は帰義軍政権に貢献を捧げてきたが，ドルポたちは何も貢献をしていないし，またドルポたちの訴えは嘘である．よって帰義軍節度使に訴える．

原告の訴えに対する回答は刺史より上位の「僕射」＝帰義軍節度使が出しているから，訴えは節度使に上訴されたのであろう．

なおキルギスと帰義軍政権との関係ですぐに想起されるのが，大英図書館所蔵スタイン収集チベット語文書チベット文字転写漢語阿弥陀経である（高田 1983）．同経の奥書部分 IOL Tib J 1410（＝ Ch.77.II.3 = de la Vallée Poussin 1961, C130）は，寅年にキルギス国にいた河西節度押衙殿中侍御の康ジェマン（khang rje mang）なる人物の手になるもので，故国に速やかに帰れることができるようにとの願いが記される．なお康ジェマンがその後帰国できたのは，IOL Tib J 1410 が敦煌文書として存在することが証明している．

高田（1983）は当初この文書を9世紀半ばとしてチベット支配期と考えたが，後に帰義軍初期のものと見方を変えた（Takata 1987, p. 99）．高田（1987, p. 97）も指摘する通り，康ジェマンの肩書きである押衙がチベット支配期には現れず帰義軍期しか現れないことからすると，やはり帰義軍期と考えた方がよかろう．

注目したいのはこの押衙の肩書きをもつ康ジェマンがキルギス国に滞在していたことである．というのも，史料4にも，康押衙がキルギスにさらわれたニョ姓のゼデムなる人物と何らかの関わりをもって現れているからである．「康」姓の「押衙」が同一時期に複数存在していた可能性はもちろん否定できないとはいえ，IOL Tib J 287 1410 の康ジェマンも史料4の康押衙もともにキルギスと関連があることを考えると，同一人物である可能性は高いであろう．もし両者が同一人物であると仮定すると，史料4の日付が849年であるから，IOL Tib J 1410 の

紀年である寅年はその数年後の855年か，あるいは867年あたりが年代の候補になるであろう．しかし後者の867年だと18年も開くことになることになるから，前者の855年の方がより整合性があるだろう．本文書の係争に康ジェマンがどのように関わっているのか，文書が破損しているためにはっきりしないが，「私」が彼女らを買い取る際にキルギスとの交渉に関わったのかもしれない．

さて，史料4にみえるドルポは，「ドルポの小部」「ドルポの逃戸」「ドルポたち」という表現からみて，明らかに集団名として扱われている．しかも登場するドルポの個人名は明らかに漢人名ではない．それどころか婢女のニョ・ゼデムはチベット人の名称でもない．ミ兄弟については，その個人名であるパンツァブ・シェデンとマレク某についてはいかにもチベット名であるが，その姓であるミはチベットのものではなさそうである．すると，ドルポはやはりチベット人でも漢人でもない部族集団であったと考えるべきであろう．

まとめると，本文書は帰義軍政権初期において粛州にドルポなる集団が存在し，彼らは元来チベット人でも漢人でもなかったことを示すのである．

5．ルンドルとドルポ

次に，敦煌チベット語文書P.t.1089に現れる一節について考察したい．P.t.1089はデの属州（bde khams）からチベット支配期の敦煌に発行された下行公文書で，敦煌におけるチベット人・漢人同士の序列争いについての裁定である．テキスト中には合計4つの役職序列リストが引用されている．今本稿で注目したいのは，4つのリストのうち涼州の軍管区（mkhar tsan khrom）の役職序列で，その内に民族・部族集団序列についての記述がある部分である．

史料5

チベットとスムパの千戸部長	bod sum yI stong pon
トンキャプとアシャの千戸部長	mthog kyab dang 'a zha'i stong pon
チベットとスムパの千戸部小長	bod sum gyI stong cung
唐とウイグルの通訳	rgya drugI lo tsa pa
ルンドルの将校（dmag pon）[19]	lung dor gyI dmag pon
トンキャプとアシャの千戸部小長	mthong kyab dang 'a zha'i stong cung
蛮夷（lho bal）[20]の小将校	lho bal gyI dmag pon chung ngu

（P.t.1089, ll. 36–43）

(19) dmag (d)pon は一般的に「将軍」と訳されるが，P.t.1089の文脈からするとむしろ軍隊中の各長や「将校」を指す一般的な術語と考えられる．

(20) lho bal がいわゆる「蛮夷」にあたることについては，Richardson 1998 [1983], Takeuchi 1984 を参照されたい．

チベット，スムパ，アシャ（吐谷渾），ウイグル，そして蛮夷といった民族・部族集団の中にルンドルの将校（lung dor gyi dmag dpon）なる人々が現れる．このルンドルが何かをめぐってはこれまで様々な解釈が提出されてきた．P.t.1089 の訳注にはラルー（Lalou 1955），山口瑞鳳（1981），汶江（1987），王堯・陳践（1989），シェラ＝シャウプ（Scherrer Schaub 2007）があるが，それぞれのルンドルの解釈は以下の通りである．

- ラルー（Lalou 1955, p. 31）：ルンとドルの 2 つに分け，ドルをドルポと関連付ける．
- 山口（1981, p. 17 & p. 40, n. 60）：「遺棄地区」と訳す．
- 汶（1987, p. 46）：「隴多」とし，音訳するのみ．
- 王・陳（1989, p. 110）：「隴道」とし，音訳するのみ．
- シェラ＝シャウプ（Scherrer-Schaub 2007, p. 293）：ルンとドルに分ける．

まとめると，ルンとドルという 2 つの語に分けて解釈する説（ラルー，シェラ＝シャウプ），遺棄地区説（山口），音訳のみ（汶，王・陳）の 3 説に大別できるが，この 3 説にはそれぞれ欠点がある．

まずルンとドルに分けて後者をドルポに関連づけるラルー説であるが，後ろのドル＝ドルポに関しては問題がないとして，前のルンについては不明のままに置かれたことが問題であった．またシェラ＝シャウプ（Scherrer-Schaub 2007, p. 293 また p. 262, n. 17）もやはりルンとドルに分けるが，2 つが何に当たるのかについては明確にしていない．

「遺棄地区」説について，山口はドル（dor）を動詞の 'dor「遺棄する」と結びつけて解釈する．一方のルンに関しては特に説明をしていないが，おそらく lung「谷，地区」と解釈したのであろう．そして 2 語の語義解釈をもとにして「遺棄された地区」という訳語を決定したようである．しかしそもそも「遺棄地区」とは具体的に何を指すのかよく分からないし，さらにその遺棄された地区にどうして将校がいるのか，奇妙である．

音訳説については，ルンドルを一つの術語とみていることだけは分かるものの，結局ルンドルが具体的に何なのかについては棚上げのままにしているところに問題がある．

それでは，以上の説のうちいずれを採るべきであろうか．まず筆者が注目したいのは，リスト内に現れる民族集団の並べ方である．

千戸部長

チベット人とスムパ人

トンキャプ人と吐谷渾人

千戸部小長

チベット人とスムパ人

トンキャプ人と吐谷渾人

通訳

漢人とウイグル人

将校

ルンドル

小将校

蛮夷（lho bal）の人

一見して明らかな通り，ルンドルを除くと他は全て民族集団名であり，さらに「蛮夷」を除くとチベットとスムパ，トンキャプとアシャ，唐とウイグル，というようにすべて対になって現れている．蛮夷（lho bal）とはチベットからみた辺境の民を指す一種の汎称であるから（Richardson 1998 [1983], Takeuchi 1984），この部分が対になっていないのは十分理解出来ようが，他が 2 集団を対にしていることから類推すると，ルンドルもやはりルンとドルの対になっており，いずれも民族集団名であると考えるのが自然であろう．このように考えると，ルンドルのドルに関してはラルーのドルポ説が最もふさわしいことになる．ただしラルー説の問題は，前半のルンが不明のままにあったことである．

しかし実はこの問題についてはある程度の考察がなされている．チベット学と全く異なる方面からルンドルを解釈しようとした黄盛璋（2007）は，基本的にルンドルを一つの術語としてみるものの，ルンドルのルンを，焉耆に居り後に河西に遷った龍家[21]と結びつけ，ルンドルのルンが「龍」の音訳とした上で，ドルは漢語の「家」に対応する語であるとしたのである．

ルンが「龍」に比定されることは，P.t.1263「蕃漢対照語彙」に現れる「lung rje 龍王」という対訳例からも疑う余地はなく，筆者もこの案に賛成である．ただし黄説の問題点はドルの解釈である．黄はこのドルが「家」にあたると推測し，ルンドル＝龍家であると説明している．そしてドル＝家と推測する理由について，その龍族が元々焉耆出身であるからドルは「家」を意味する未知のトカラ語 A なのではないかとする（黄 2007, p. 251）．

しかし残念ながらドル＝家説には何の根拠もなく，説得力に欠けると言わざるを得ないが，我々はすでにドル＝ドルポ，という見解を有しているのであるから，あとは黄の唱える通りルン＝龍であると考えるだけでルンドルの謎が解けたことになる．したがって筆者は，ルン・ドル＝龍家とドルポの 2 集団である，と結論付けたい[22]．

---

(21) 龍家についてはまた栄 1995, 陸 1997 を参照されたい．

(22) 興味深いのは，チベットの支配下の涼州において龍家の隊長がいたということである．栄（1995）によると，龍家が本格的に敦煌文書に現れ出すのは 9 世紀末からであり（同, p. 148），龍家が河西地域

6．ドルポとは何か

さて上の考察に基づくと，龍家とドルポはチベット帝国支配下の涼州周辺に居て，チベット帝国の民族・部族序列の中に位置付けられ，しかも将校を出すくらいの規模を有していたとみることができる．さらに，史料 4 にもみえるとおり，ドルポは帰義軍初期にも粛州に居たことになる．では，今まで考察してきたドルポとは，元来どのような集団であったのであろうか．

そもそもドルポなる名称が何を指すかもう少し考えてみたい．すでに様々な研究者が夙に指摘してきた通り(23)，チベット帝国が他民族集団を支配下にいれた時にその集団に新たな名称を与えた例が確認されている．例えば党項をミニャク（myi nyag）に，多彌を難磨に，コータンをリ（li）に，そして栄新江（1991）が明らかにしたとおり黄河源流の様々な出自の集団をまとめてトンキャプ（mthong khyab，通頬）と称したが如くである．これは民族・部族の別を明確にして序列をつけるというチベット帝国の国是と明らかに関係している(24)．

そうすると，ドルポなる名称がチベット支配以前から存在したのか，それとも改称後に新たに作られたのかという問題があるが，上述のチベット語史料にて一貫してドルポと現れていることからすると，改称後の呼称と考えるのが自然であろう．

ドルポと改称される以前の彼らの集団名がどのようなものであったかについては，残念ながら管見の限り古チベット語文献にも漢語文献にも直接的な史料が見当たらず，また彼らの故地についても，史料 3 からわかる限り洮州より西側ということくらいしか分からない現状では，彼らがどのような集団であるかを明らかにすることは極端に難しい．しかし一定程度の推測は可能であろう．

まず確実に指摘できることは，ドルポは元々チベット語話者集団ではなかったということである．というのも，史料 4 に現れるドルポは，ミ・パンツァブ・シェデンとミ・マレク某，ニョ・ゼデムの 3 人であったが，このうちニョ・ゼデムは明らかに非チベット人の名乗りである

に流入した主な理由はウイグルの龐テギンが焉耆を占拠したことによって東遷したからという（同, pp. 148–150）．しかし今 P.t.1089 によると，チベット支配期の涼州にすでに龍家が現れていることになる．P.t.1089 の発行年は研究者によって見方が異なるが，最も遅くに置く山口（1982, p. 5）でも 830 年とみているから，9 世紀前半には龍家の隊長が河西に現れていることになる．そうなると，龍家の河西地域への流入は龐テギンの焉耆占拠よりも早くに始まっていたと見るべきであろう．関連して言及しておきたいのは，『年代記』l. 381（史料 1 で引用した箇所の直前）に現れる lung gi rgyal po nung kog である．これが「龍家の王ヌンコク」と解釈できることは明らかであろう．さらに『年代記』の文脈から，この王が史料 1 に現れるチベットの涼州攻略と同時期にチベットの支配下に入ったことがわかる．ではこの龍家の王とは誰かという問題が生じるが，この点については別のところで論じたい．

(23) 例えば佐藤 1977, pp. 285–286, 岡崎 1972, pp. 27–28, 栄 1991, p. 138 を挙げておこう．

(24) 民族・部族による序列の中で，チベット支配下の各集団は所属と居住地域を決定された．チベット人たちもこの序列の中に当然組み込まれた．史料中には時々「チベットの地域」（bod yul）という語が現れるが，その指す意味は明らかにチベット国全体ではなく，帝国全体の中央＝チベット人居住区なのである．つまりチベット帝国の領域は複数の民族・部族集団とその居住区で構成されていたはずである．この点については別稿で詳しく述べたい．

し，またミ姓もチベット人の中に見あたらないのである．唯一ミ兄弟の名前パンツァブ・シェデンはチベット語名のようであるが，これはドルポがチベット支配下に入った後に獲得された習慣であろう[(25)]．

次に指摘できることは，ドルポの所属である．史料 1 によれば彼らはまず 7 世紀後半に民（'bangs）としてチベットの支配下に入るも，史料 2 によれば 8 世紀中葉になって再び民として選ばれたのであった．8 世紀に再度民として選ばれたというのをどのように解釈すべきであるか，はっきりしたことはわからないが，はじめの服属から一世紀間に何かがあって彼らは民ではなくなり，後に 8 世紀後半の働きによって再び民として取り立てられたということかも知れない．

民（'bangs）ではなくなる場合，おそらくは民よりも下の身分である奴婢（bran）になったのであろう．チベット帝国では個人の奴婢でだけでなく集団としての奴部が存在していたから[(26)]，ドルポも何らかの理由で一旦得た民の地位を失い奴部になったと推察される．しかし全くの推定であり，史料 1 か史料 2 のいずれかが誤っているという可能性も排除はできない．

いずれにせよ民に取り立てられたドルポは，史料 5 によると 9 世紀前半には涼州に少なくともその一部が居り，そして史料 4 によると帰義軍政権初期の 856 年には粛州付近にも居た．したがって少なくとも 9 世紀前半にドルポは河西地域に居たということになる．そうすると，伝世・出土の漢語史料に彼らの名前が現れても良さそうなものであるが，漢語史料にはドルポらしき部族集団（例えばドルポの音訳らしき名称）が全く見つからないのである．

ただし，9 世紀後半の河西地域の状況を示す次のような敦煌文書断片がある．

史料 6

（前欠）

□□供奉前後文[

闍使君等同行，安置瓜州，所有利害

事由，並与闍使君状諮申，同縁河西

諸州，蕃・渾・温末・羌・龍狡雑，極難調伏

（後欠）

（S.5697）[(27)]

---

(25) チベット帝国の支配下に入った非チベット人たちが，チベット語・チベット文化の受容とともにチベット名を使い出す例については Takeuchi 1995, pp. 130–133 ならびに武内 2002, Takeuchi 2004 を参照されたい．

(26) 嗢末（'on bar）は元々「吐蕃奴部」であったが，チベット帝国の分裂が地方に波及した時に独立して一集団を作った．『新唐書』巻 216 下，吐蕃伝，pp. 6109–6109.

(27) 唐・陸 1986–1990, vol. 4, p. 361.

史料 7

河西創復，猶雑蕃渾，言音不同，羌龍嗢末，雷威慴伏，訓以華風，咸会馴良，軌俗一変．

（「勅河西節度使兵部尚書張公徳政之碑」）[28]

史料 6 は，栄（1995, pp. 146–147）によると 9 世紀後半，帰義軍政権初期に年代比定されるものであり，また史料 7 引用部分もやはり帰義軍政権初期の張議潮時代（848–867）の状況を伝えたものである．この 2 史料によると河西地域に現れる非漢人集団には，蕃（チベット），渾（吐谷渾）・温末（嗢末＝オンバル），龍（＝龍家）とともに「羌」がいたとのことである．漢時代には青海に展開していた羌族諸部がチベット帝国期にどのようにその支配を受けていたのか必ずしも明らかになっていないが，筆者にとって興味深いのは，史料 5 では龍族とドルポがまとめて「ルン・ドル」と言及されていたのに対し，史料 6・史料 7 ではドルポに相当する表記がみえない一方で「羌・龍」がまとめて言及されることである．ドルポたちが漢語文書では「羌」と呼ばれていた可能性が，ここに浮上する．

さらに筆者が注目したいのは，ドルポの元来の居住地である．先に，7 世紀半ばにドルポの居住地域が洮州〜永靖県のラインの西側であったと考察したが，当該地域には「洮州羌」が存在していたことが，編纂史料から確認される．

史料 8

貞観 9 年，（中略），党項に内属する羌と洮州羌が皆で刺史を殺し，【吐谷渾王の】伏允に帰属した．

貞観九年，（中略），党項内属羌及洮州羌，皆殺刺史帰伏允．

（『新唐書』巻 221 上，西域伝上吐谷渾伝，p. 6225）

史料 9

三月庚寅，洮州羌が刺史孔長秀を殺して吐谷渾に附いた．

三月庚寅，洮州羌殺刺史孔長秀，附吐谷渾．

（『新唐書』巻 1，太宗本紀貞観 9 年 3 月庚寅条，p. 35）

上の史料 8 と 9 はいずれも貞観 9（635）年 3 月，李靖の対吐谷渾攻撃のときの出来事であり，7 世紀前半には洮州羌なる名称を有する集団がいたことを示す．その名称からして彼らが洮州付近にいたことは間違いない．そしてもしドルポ＝羌という同定が正しいとすると，ドルポとは元々洮州羌であったという可能性は十分にあるのではなかろうか．

---

(28) この文書（S.6161 + S.3329 + S.6973 + S.11564 + P.ch.2762）の研究及び録文については栄 1996, pp. 399–410 を参照されたい．

結論

小考では古チベット語文献に現れるドルポなる術語について考察した．以上の考察の結果を時系列に沿ってまとめると，次のような結論になるであろう．

ドルポは部族集団の名称であり，従来の研究で言われたような「降伏者」の意味ではない．彼らは元々洮州～永靖県の西側に居住する集団であり，6 世紀前半に存在が確認される洮州羌と同一の可能性がある．7 世紀半ばにチベット帝国の支配下に入ってドルポと改称された．彼らは当初からチベットの平民として扱われていたが，その後奴部に落とされたのか，8 世紀後半になって再び平民として選ばれた．彼らの一部は河西地域の涼州に駐留しており，またチベット帝国崩壊後の 9 世紀後半には粛州にもドルポの集団が存在したことが確認される．

10 世紀に入るとドルポたちの消息は史料上に途絶え，その行方は杳として知れない．チベット帝国支配下にあった各集団，例えば吐谷渾やスムパは帝国崩壊後も集団としてのまとまりを失わず，また本稿中でも言及した嗢末やさらには敦煌を拠点にした帰義軍政権のように，帝国崩壊を機に新たな集団を創出して生き残りを図った集団も存在した．しかし一方で帝国の庇護を失うと歴史上から消えていった集団も存在したはずであり，本稿で取り上げたドルポはまさにそのような集団なのである．

一次史料・略号

DPA'-BO: Dpa' bo gtsug rag phreng ba, *dam pa'i chos kyi 'khor los bsgyur ba rnams kyi byung ba gsal bar byed pa mkhas pa'i dga' ston* *Ja 章．民族出版社，北京，全 2 巻，1986.

P.t.：Pelliot tibétain

『元和郡県図志』：李吉甫（撰）賀次君（点校）中華書局，1983.

『新唐書』：欧陽脩・宋祁（撰）中華書局，1975.

『資治通鑑』：司馬光（編著）胡三省（注）標点資治通鑑小組（校点）　中華書局，1956.

『読史方輿紀要』：顧祖禹（撰）賀次君・施和金（点校）　中華書局，2005.

『年代記』：Old Tibetan Chronicle. P.t.1287.

『編年記』：Old Tibetan Annals, version 1. P.t.1288 + IOL Tib J 750.

参考文献（ABC 順）

Bacot, Jacques, Thomas, Frederick William, and Toussant, Gustave-Charles

1940–1946 *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris, Librairie orientaliste Paul Geuthner.

Beckwith, Christopher I.

1983 The Revolt of 755 in Tibet. In: E. Steinkellner and H. Tauscher (eds.), *Contributions on Tibetan Language, History, and Culture*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 10. Wien, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, pp. 1–16.

Dotson, Brandon

2009 *The Old Tibetan Annals: An Annotated Translation of Tibet's First History, with an Annotated Cartographical Documentation by Guntram Hazod*. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.

gnya' gong dkon mchog tshes brtan

1995 *Bod kyi brda rnying yig cha bdams bsgrigs* 吐蕃文献選読（蔵文）．北京，中央民族大学出版社.

黄布凡・馬徳 Huang Bufan and Ma De
2000 『敦煌蔵文吐蕃史文献訳注』蘭州，甘粛教育出版社.
黄盛璋 Huang Chengzhang
2007 「漢于闐吐蕃文献所見“龍家”考」『絲綢之路民族古文字与文化学術討論会文集』上巻．西安，三泰出版社．pp. 225–258.
池田温 Ikeda On
1983 「口馬行考」『佐久間重男教授退休記念 中国史・陶磁史論集』東京，燎原，pp. 31–57.
Imaeda Yoshiro, Takeuchi Tsuguhito, Hoshi Izumi, Ohara Yoshimichi, Ishikawa Iwao, Iwao Kazushi, and Nishida Ai
2007 *Tibetan Documents from Dunhuang Kept at the Bibliotheque nationale de France and the British Library*, Tokyo, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
岩尾一史 Iwao Kazushi
2000 「吐蕃のルと千戸」『東洋史研究』59-3, pp. 1–31.
2016 「9世紀の帰義軍政権と伊州 —Pelliot tibétain 1109を中心に」『敦煌写本研究年報』10, pp. 341–356.
Jäschke, Heinrich August
1881 *A Tibetan-English Dictionary*. London, Secretary of State for India in Council.
Karlgren, Bernard
1957 *Grammata Serica Recensa* (*Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, 29). Stockholm, The Museum of Far Eastern Antiquities.
Lalou, Marcelle
1955 Revendications des fonctionnaires du grand Tibet au VIIIe siècle. *Journal Asiatique*, 243, pp. 171–212.
陸慶夫 Lu Qingfu
1997 「従焉耆龍王到河西龍家–龍部落遷徒考」『敦煌研究』1997-2, pp. 169–178.
岡崎精郎 Okazaki Seiro
1972 『タングート古代史研究』京都，同朋舎.
Richardson, Hugh E.
1998 [1983] Bal po and Lho bal. In: *High Peaks, Pure Earth: Collected Writings on Tibetan History and Culture*. London, Serindia Publications, pp. 102–105. First published in *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, 46-1, pp. 136–138.
栄新江 Rong Xinjiang
1991 「通頻考」『文史』第33輯，pp. 119–144.
1995 「龍家考」『中亜学刊』第4輯，北京大学出版社，pp. 144–160.
1996 『帰義軍史研究—唐宋時代敦煌歴史考索』上海，上海古籍出版社.
坂尻彰宏 Sakajiri Akihiro
2002 「帰義軍時代のチベット文牧畜関係文書」『史学雑誌』111-11, pp. 57–84.
佐藤長 Sato Hisashi
1977 『古代チベット史研究』上下巻，京都，同朋舎．初版：1958-59年.
Scherrer-Schaub, Cristina
2007 Revendications et recours hiérarchique: contribution à l'histoire de Śa cu sous administration tibétaine. In: J.-P. Drège (ed.), *Études de Dunhuang et Turfan*. Genève, Droz. pp. 257–326.
高田時雄 Takata Tokio
1983 「チベット文字転写阿弥陀経の奥書：蔵漢対音資料の年代についての考え」『人文研究』65, pp. 1–13.
1987 Note sur le dialecte chinois de la région du Hexi 河西 aux IXe et Xe siècles. *Cahiers d'Extrême-Asie,* 3, pp. 93–102.
1988 『敦煌資料による中国語史の研究 —九・十世紀の河西方言—』東京，創文社.

武内紹人 Takeuchi Tsuguhito

1984 On the Old Tibetan Word Lho-bal. In: T. Yamamoto (ed.), *Proceedings of the 31st International Congess of Human Sciences in Asia and North Africa.* Tokyo, The Toho Gakkai (The Institute of Eastern Culture). pp. 986–987.

1990a 「中央アジア出土古チベット語家畜売買文書」『内陸アジア言語の研究』5, pp. 33–67.

1990b A Group of Old Tibetan Letters Written under Kuei-i-chün: A Preliminary Study for the Classification of Old Tibetan Letters, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 44-1/2, pp. 175–190.

1995 *Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo, Daizo shuppan.

2002 「帰義軍期から西夏時代のチベット語文書とチベット語使用」『東方学』104, pp. 124–106（逆頁）.

2004 Sociolinguistic Implications of the Use of Tibetan in East Turkestan from the End of Tibetan Domination Through the Tangut Period (9th–12th). In: D. Durkin-Meisterernst et al. (eds.), *Turfan Revisited: the First Century of Research into the Arts and Cultures of the Silk Road*. Berlin, Reimer Verlag, pp. 341–348.

Thomas, Frederick William

1951 *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*. Vol. 2. London, Royal Asiatic Society.

1955 *Tibetan Literary Texts and Documents Concerning Chinese Turkestan*. Vol. 3. London, Royal Asiatic Society.

唐耕耦・陸宏基 Tang Geng'ou, Lu Hongji

1986–1990 『敦煌社会経済文献真蹟釈録』全 5 巻．北京，全国図書館文献縮微複製中心・古佚小説会．

Uray Géza

1980 *KHROM*: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th–9th Centuries. In: *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson: Proceedings of the International Seminar on Tibetan Studies*, Oxford, 1979. Warminster, Aris & Phillips. pp. 310–318.

1981 L'emploi du tibétain dans les chancelleries de Étas du Kan-sou et Khotan postérieurs à la domination tibétaine, *Journal Asiatique*, 269, pp. 81–90.

1991 The Location of Khar-can and Leng-cu of the Old Tibetan Sources. In: *Varia Eurasiatica: Festschrift für Professor András Róna-Tas*. Szeged, Department of Altaic Studies. pp. 195–227.

de la Vallée Poussin, Louis

1962 *Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office Library with an Appendix on the Chinise Manuscripts*. Oxford, Oxford University Press.

王堯・陳践 Wang Yao and Chen Shen

1989 「吐蕃職官考信録」『中国蔵学』1989-1, pp. 102–117.

1992 『敦煌本吐蕃歴史文書 (増訂本)』北京，民族出版社.

汶江 Wen Jiang

1987 「吐蕃官制考: 敦煌蔵文巻子 PT1089 号研究」『西蔵研究』1987-3, pp. 40–48.

吉田豊・森安孝夫・新疆ウイグル自治区博物館 Yoshida Yutaka, Moriyasu Takao, Shinkyo Uiguru Jichiku Hakubutsukan

1988 「麹氏高昌国時代ソグド文女奴隷売買文書」『内陸アジア言語の研究』4, pp. 1–50.

山口瑞鳳 Yamaguchi Zuiho

1981 「沙州漢人による古代チベット二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』4, pp. 3–48.

1982 「漢人及び通頰人による沙州吐蕃軍団編成の時期」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5, pp. 1–21.

1985 「吐蕃支配期以降の諸文書」山口瑞鳳（編）『講座敦煌 6 敦煌胡語文献』東京，大東出版社. pp. 511–521.

〔付記〕本稿は JSPS 科研費 JP26770244，JP26300023 による研究成果の一部である．